

シオン通信

大宮シオン・ルーテル教会 礼拝説教集

2006年7月 第1号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax : 048-663-0215

おげんきですか？

大宮シオン・ルーテル教会

梁 熙 梅(やん・ひめ)

4月から大宮教会で働かせていただいております梁 熙梅です。この3月に神学校を卒業し、教団に招聘していただき、大宮教会に派遣されました。

韓国済州島で生まれ育ち、1989年来日して、17年が経とうとしています。

家族は、北海道の深川教会で牧師をしているつれあいと、そして大宮で一緒に生活しています小学校3年生の息子智倫(ともみち)です。どうぞよろしく願いいたします。

みなさんに「シオン通信」をお届けいたします。これは、教会にいらっしゃることができない方々にも、聖書のみことばをお届けしたいと教会の役員会で話し合われ、礼拝で語られた説教をプリントして、みなさんに送らせていただくということになったものです。

読み返してみると、とても活字にして、みなさまに送ることができるものではないのですが、用いてくださる神さまのお働きを信じて、そして何よりも、礼拝にいらっしゃれないみなさんとも、一緒に、教会の礼拝で語られたのと同じメッセージを分かち合うことができればと願い、送らせていただきます。

この「シオン通信」が、みなさんが聖書のみことばと出会い、そして、神さまと出会っていただくために、少しでもお役に立つならば、この上ない喜びです。

ご都合がよろしければ、ぜひ大宮教会でお会いいたしましょう。ご希望でしたら、訪問もいたしますので、ご連絡いただければ幸いです。

送付を不要の方は、お手数ですが、教会までご一報くださいますよう、お願いいたします。

【ワンポイント豆知識】「ペンテコステ」

6月4日は、教会の暦で「聖霊降臨祭」でした。

「聖霊降臨祭」のことを、よく「ペンテコステ」と呼びます。

「ペンテコステ」とは、「50」を意味するギリシア語であり、聖書では、ユダヤ教の「五旬祭」(使徒言行録 2:1)のことを表します。

イエスが昇天された日から10日後(復活より「50日」目!)の「五旬祭」=「ペンテコステ」の日に、約束の聖霊が、弟子たちと、神殿に集まっていた人たちに与えられました。

このため、「聖霊降臨祭」のことを、「ペンテコステ」と呼ぶのです。

聖書のみことば

エゼキエル 37:1-14

主の手がわたしの上に臨んだ。わたしは主の霊によって連れ出され、ある谷の真ん中に降ろされた。そこは骨でいっぱいであった。主はわたしに、その周囲を行き巡らせた。見ると、谷の上には非常に多くの骨があり、また見ると、それらは甚だしく枯れていた。そのとき、主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨は生き返ることができるか。」わたしは答えた。「主なる神よ、あなたのみがご存じます。」そこで、主はわたしに言われた。「これらの骨に向かって預言し、彼らに言いなさい。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。これらの骨に向かって、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。わたしは、お前たちの上に筋をおき、肉を付け、皮膚で覆い、霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。そして、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。」わたしは命じられたように預言した。わたしが預言していると、音がした。見よ、カタカタと音を立てて、骨と骨が近づいた。わたしが見ていると、見よ、それらの骨の上に筋と肉が生じ、皮膚がその上をすっかり覆った。しかし、その中に霊はなかった。主はわたしに言われた。「霊に預言せよ、人の子よ、預言して霊に言いなさい。主なる神はこう言われる。霊よ、四方から吹き来れ。霊よ、これらの殺されたものの上に吹きつけよ。そうすれば彼らは生き返る。」わたしは命じられたように預言した。すると、霊が彼らの中に入り、彼らは生き返って自分の足で立った。彼らは非常に大きな集団となった。主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨はイスラエルの全家である。彼らは言っている。『我々の骨は枯れた。我々の望みはうせ、我々は滅びる』と。それゆえ、預言して彼らに語りなさい。主なる神はこう言われる。わたしはお前たちの墓を開く。わが民よ、わたしはお前たちを墓から引き上げ、イスラエルの地へ連れて行く。わたしが墓を開いて、お前たちを墓から引き上げるとき、わが民よ、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。また、わたしがお前たちの中に霊を吹き込むと、お前たちは生きる。わたしはお前たちを自分の土地に住まわせる。そのとき、お前たちは主であるわたしがこれを語り、行ったことを知るようになる」と主は言われる。」

使徒言行録 2章1節-21節

五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、”霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉で使徒たちが話をしているのを聞いて、あっけにとられてしまった。人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。

すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているものではありません。そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。『神は言われる。終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。わたしの僕やはしためにも、そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。上では、天に不思議な業を、下では、地に徴を示そう。血と火と立ちこめる煙が、それだ。主の偉大な輝かしい日が来る前に、太陽は暗くなり、月は血のように赤くなる。主の名を呼び求める者は皆、救われる。』

わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。これらのことを話したのは、あなたがたをつまずかせないためである。人々はあなたがたを会堂から追放するだろう。しかも、あなたがたを殺す者が皆、自分は神に奉仕していると考える時が来る。彼らがこういうことをするのは、父をもわたしをも知らないからである。しかし、これらのことを話したのは、その時が来たときに、わたしが語ったということをあなたがたに思い出させるためである。」

説教

『生きるものになれ！』

先週の金曜日は浦和ルーテル学園の中等部礼拝に招かれて、お話をしてきました。中学生を相手に話すのが十数年ぶりだったので、なかなか感覚がよみあがってこない中でメッセージの準備をしました。中学生の年頃は難しい時期だし、人の人生の中で純粋に悩める時期でもあれば、それだけ不安も多い時期だと思います。ですから、その一人ひとりの心に語られるものとしての神さまの話を、いったいどのように伝えればいいのかと、悩んだのです。難しいと思いながら、わたしも年をとってきたなど、悲しい思いもありました。

礼拝が終わって校長先生と話を交わす時間がありました。お互いが語る立場に立たされている者として感じているのは、十人いたら十人に当てはまるような話ができないと。だから自分がこれだと信じられたものを語るしかない。そのときに、聞く側にいる生徒には話の全体がわからないかもしれないけれども、全体はわからなくても部分的な言葉だけでも聞き取れ

ているならば、それがやがて実りを与えるのではないかということをお互いに共感しながら交わすことが出来ました。

このような話をわたしは、今日の日課とリンクしながら、きっとペンテコステの日に起きた出来事はこのようなことではなかったのかと思いました。つまり、弟子たちが語っていることがそこに集まっていた人たち、それぞれ語る言葉が異なる国の人たちにわかったということは、言語の壁を越えて、語られている事柄の意味が伝えられたのだということなのです。

ある意味、人の語る言語には、それだけ無駄なものが多いのかもしれませんが。(わたしの説教も無駄なものが多いと思いますが、お許しください)。

相手に、何かを語ろう、語ってやろうとすると、そのときは本当に伝えようとしているものが伝わっていかないのです。ですから、本当に伝えたいことがあるときには、自分が聞いたときにも嬉しくなる言葉

や嬉しくなる口調で話をする事の大切さを、聖霊降臨祭を迎える中で、わたしたちは再び気づかされるのです。

つまり、弟子たちが、以前の、イエスさまの復活のメッセージも信じなかったときの弟子たちであったならば、いくら熱心に語ったって人たちには伝わってこなかったと思います。しかし、今、弟子たちは、主の昇天を目撃した証人として、喜びに満ち溢れていましたし、その喜びの中に神さまの霊の働きが豊かに与えられているのです。そんな弟子たちに、今だからできること、今だからこそ豊かにされること、今、この時、約束された時だからこそ、語る言葉もそして語られた人々の心も喜びに満ち溢れているのではないのでしょうか。

もっと申しますと、自分の中に壁を作らないことです。自分が決めたルールの枠組みの中で物事を判断し、向き合う相手もそれに合わせようとしているときに、いくら訴えても、相手には伝わらないのです。むしろ逆反応が返ってくるだけなのです。

イエスさまが働いておられた時のファリサイ派の人たちや律法学者たちがこのようなことをしていました。文字で記されている律法を基準に、律法こそが最も正しい生き方の道しるしでもあるかのように、それを守るか守らないかによってすべてを判断していくのです。

ファリサイ派の人たちがイエスさまに問われる有名な場面がありますが、安息日に弟子たちがある畑から麦の穂を取って食べているのを見て、律法に反することを犯しているとファリサイ派の人たちが

批判をします。すると、イエスさまは、安息日は人のためにあるのであって、人が安息日のためにあるのではないとお答えになりました。

つまり、大切な律法、規則であっても先ず人が生きてこそ守られるのであって、人がいのちを失ってしまえば何の意味もないということなのです。

私たちはよく知っているつもりで、しかし、ともすると自分の中に「こうあるべき」とか「こうしなければならない」という律法を立てておいて、それから外れる自分を許せない、それから外れる相手を許せないと、ファリサイ派的に形に捉われたかわりをしてしまうのではないのでしょうか。

今日の福音書の中にも同じことが言われています。16:2 からのことばですが、「人々はあなた方を会堂から追放するだろう。しかも、あなた方を殺す者が皆、自分は神に奉仕していると考える時が来る。彼らがこういうことをするのは、父もわたしをも知らないからである。」と、イエスさまは語られます。

もちろん、この語りかけは弟子たちを相手にして語られていることばですし、この弟子たちを迫害し、殺すために現れる人たちははっきり誰のことなのかわかりません。ただ、「あなた方を殺す者が皆、自分は神に奉仕していると考える時が来る」と語れることばから、迫害する側に立つ人も弟子たちが信じている同じ神さまを信じる人たちであることがわかります。ですから、ひよっとしたら弟子たちと同じ共同体の仲

間かも知れません。または、同じ国の仲間かも知れません。または、世界各地に散らされている仲間たちの群れの誰かかも知れません。とにかく、同じ神さまを信じている仲間が迫害する側に立ってしまうということです。そして、そんなことをしながら、自分は神に奉仕していると考える時が訪れるというのです。

実際に弟子たちは迫害の中で殉教していきませんが、イエスさまのことを伝えているだけで弟子たちは迫害にあったのです。ですから、迫害する側にいる人たち、つまり、同じ神さまを信じていながら仲間を迫害して、そのいのちまで殺していくような働きに遣わされるということは、ファリサイ派的な、形に捉われた神信仰をもっているがために「こうあるべき」という形に当てはまらないイエスの弟子たちを迫害し、そのいのちまで奪っていったのではないのでしょうか。

わたしは今日のイエスさまの語られる言葉に出会いながら、わたしだって迫害する立場に立ちかねない、場合によってはそんな者でしかない自分であることを知らされました。ともすると、何らかの形を作っておいた方が生きやすいし、それによって判断しやすいからすぐ自分の知識と知恵を基準とした形を作り上げようとしてしまうのです。そんな自分が、その形に当てはまらない相手が出来たときには、やはりやっつけるしかないでしょう。すると、段々と自分と相手との間には壁が高くな

ってしまう…

今日は旧約聖書からも共に分かち合うときを持ちたいと思いますが、

イスラエルの民も神さまの掟から離れて、自分たちの判断にたよって生きるようになり、結局は形あるものに執着してしまいました。偶像を拝んだり、快樂主義になって隣人の苦しみも無関心であったイスラエル民が経験するのは、自分たちの国が強い国に奪われて、自分たちは捕虜となって連れて行かれるということでした。神さまを礼拝していた神殿も壊されましたし、自分たちが楽しく過ごしていた家も家族も崩壊され、敵の国で捕虜となって暮らす、そんな羽目になってしまったのです。異国で、捕虜になって、国を取り戻す希望も何もかも失われた日々を長い間続けていた彼らに語られる神さまのことばが、今日の第一日課のエゼキエル 37 章のことばです。捕虜となっている異国で、でも神さまは預言者たちを立ててご自分の民とご自分との間をつなぐようにしていたのですが、エゼキエルという預言者もそのときに働いていた預言者の一人でした。今日、語られている預言は、これからイスラエルの民に起きることが幻を通して語られているのです。

はなはだしく枯れて散らばっていた骨が、カタカタと音を立てながら近づく。そして、その骨の上に筋がおかれ、肉が付けられ、皮で覆われ、最後は神さまが吹き込まれる霊によって、それは生き返った者となりました。そして、自分の足でしっかり立つ者となるのでした。死んで、骨でしか

なかったものが、生き返って、非常に大きな集団をなしたと、聖書は伝えています。

このことは一つのシンボリックなことですが、イスラエルの民が囚われている捕囚の国から帰ってきて大きな群れを成すようになることの預言です。新しいいのちがイスラエルの民らに与えられ、これからは新しいいのちが与えられたものとして、しっかりと自分の足で立ち、群れを成して生きるという神さまの約束が預言者エゼキエルを通してなされているのです。

人が死に、枯れた骨上体でしかなかった人間が、神さまの働きかけによって骨が汲み立たれ、筋が付けられ、肉が付けられ、霊が吹き込まれて生き返った者となって、自分の足で強く立つようになったということ。

これは、幻で、一つの象徴として語られています。しかし、このことは、実際に私たちの中に行われていることではないでしょうか。生きてはいるものの、心の通わすことのない付き合いは、まるでこのはなはだしく枯れて、ばらばらになっている骨の様ではないでしょうか。目に見えるにしろ見えないものにしろ、形にこだわりを持つ限り、わたしたち誰一人その形に当てはまる人はいません。けれども、そんな自分でしか生きられない弱いわたしたちであることを、神さまはよく知っていてくださる。ですから、捕虜となっているイスラエルの民を、もう引き返して、いのちあるものとして生きるようにしようと、決心なさるのです。この神さまの決心の中にこ

そ、真の自由に生きるキリストの道、いのちの道があることに、わたしたちは再び気づかされるのです。

わたしは外国人で、言語的な事柄から考える時には、皆さんの方が遥かに豊かな日本語を話します。しかし、外国人であるわたしがこのように説教壇で語り、それがもし皆さんに伝わっているとすれば、これは、これこそ、聖霊の働きがなければありえないことです。

聖霊の働きは、言語的な表現を通してよりも、むしろ、語る側と聞く側の心の壁を崩すことから始まるのではないのでしょうか。弟子たちが送られた聖霊の力に満たされて語るときに、集ってきた各々の外国人がそれを理解することができたように、私たちの心と心が開かれ、お互いを受け入れることができるときに、聖霊の働きはますます豊かになっていくのです。そして、やがてはわたしたちを一つの心、イエスさまの心をなしていく者として導かれていくことだと、わたしは信じています。

はなはだしく枯れた骨でしかなかった者が、非常に大きな群れを成していったように、わたしたちの教会も、今ははなはだしく枯れた骨でしかないかもしれないけれども、しかし、聖霊の働きがわたしたちとともにおられるとき、私たちの教会に約束されたその時には、必ず、非常に大きな群れを成した教会として、神さまの働きに遣わされることを信じています。そのために

わたしたちはこうして集められていることだと、信じています。イエスさまが私たちに先立って、私たちの前に置かれている壁を崩して、壊していきますから、私たちがその後に従って歩むとき、できるのです。今週も、聖霊の豊かな働きが、ここに集っている一人ひとりの上に豊かにありますように。

祈ります。

私たちのいのちの源であり、常に私たちに生きたいのちの霊の働きをもってかかっ
てくださる神さま、私たちの間におかれて
いる壁をなくし、それに変わりに神さまが
立ってください、私たち一人ひとりをつな
げてください。神さまの聖霊の働きによっ
て私たちはつながっている者、一つの家族
として、苦しいときにも嬉しいときにもあ
るものを分かち合いながら生きる者であり
たいのです。心の貧しいわたしたちであり
ますが、神さまの豊かな祝福の中で満たさ
れた者として、これからも用いられること
を心から信じて、この祈りを私たちのいの
ちの源であり、常に私たちをひとつにして
くださる主イエス・キリストのみ名によっ
て祈ります。 アーメン。

【礼拝予定】

【主日礼拝】 毎週日曜日 朝 10 時 30 分～

7月2日(日) 聖霊降臨後第4主日 聖書：イザヤ 58:11-14・2 コリント 5:1-10・マルコ 3:1-12 主題：手を伸ばしなさい 讃美歌 179/301(教団)/174
7月9日(日) 聖霊降臨後第5主日 聖書：創世記 3:8:15・2 コリント 5:11-15・マルコ 3:20-30 主題：どこにいるのか 讃美歌 151/298/401
7月16日(日) 聖霊降臨後第6主日 聖書：エゼキエル 17:22-24・2 コリント 6:1-18・マルコ 4:26-34 主題：神のオートマチック 讃美歌 171/228(教団)/285
7月23日(日) 聖霊降臨後第7主日 聖書：ヨブ 38:1-11・2 コリント 7:1-16・マルコ 4:35-41 主題：黙れ、静まれ 讃美歌 172/250(教団)/409
7月30日(日) 聖霊降臨後第8主日 聖書：哀歌 3:22-33・2 コリント 8:1-15・マルコ 5:21-43 主題：タリタ、クム 讃美歌 333/259(教団)/307

【その他の集会】 毎週水曜日 10 時 30 分～ 女性の視点を大切に聖書を学ぶ会
第三日曜日 12 時 30 分～ 聖書をやさしく学ぶ会
9月より毎週水曜日午後7時より「水曜礼拝」スタート
随時(希望にあわせて)キリスト教入門講座・面談など

どの集会もどなたでもご参加いただけます。お待ちしております。
面談や訪問・お祈りを希望される方も遠慮なくご連絡くださいね。

でんわ 048-663-0215/090-6872-6704
Eメール：himeiyang@aol.com